

る。この金だらひは、顔や手足を洗ふ道具なれど、たゞ顔手足をあらふばかりでは有るまい。心の洗ひ様もありさうなものぢや。持て歸つてとつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ」といひ捨て、障子を締めて、内へはひる。かの大根屋もこれから本心になつて夜晝働き、三年目には遂に相應な八百屋になつたといふ事であります。

(鳩翁道話)

一九 恩讐の彼方に

菊池 寛

菊池寛

小説家、文藝春秋社長。高松市の人。明治廿一年生。

市九郎は主人中川三郎兵衛と争つて、誤つて主人を殺した。彼はそのまゝ、江戸を逐電し東山道を上方へと志したが次第に悪事を重ねた擧句何時とはなしに信濃から木曾へかゝる鳥居峠に土着して、妻のお弓と共に晝は茶店を開き夜は強盜を働い

てゐた。然し或晩旅の若夫婦を殺してその旅費持物を奪つた時殺した女の櫛笄を残して來た市九郎を罵つて、それをも取らうと月明りの道を狼の様に駆け出して行つたお弓の淺ましい姿に、市九郎は自分の生活が急にたまらなく醜く思はれて來て、罪の怖しさに戦きながら、一刻も早く自分の過去から逃れたいなつて血に汚れた衣物のまゝ、當もなく飛び出した。

市九郎は山野の分ちなく、只ひた走りに走つた。二十里に餘る道を只一息に走つて、翌日の夕暮には美濃國大垣在に辿りついてゐた。彼はこゝへ來る迄何處へ止らうといふ當もなかつた。たゞ妄りに逃げ走りたかつた。一途に今迄の自分の生活から逃れたかつたのである。彼はふと、大垣在の淨願寺といふ大寺の門前へ出た。殷々と鳴り響いてゐる暮六つの鐘を聴いた時に、彼の頼りない心は端なくも縋るべき最後のものを見付

けたのである。

淨願寺は、美濃一國眞言宗の總録であつた。市九郎は、現住明遍上人に必死の教化を求めて、心からの懺悔をした。上人はさすがに、この極重悪人も捨てなかつた。市九郎が有司の下に自首しようといふのを止めて、

「重ね／＼悪業を重ねた汝ぢやから、有司の手によつて身を梟木に晒され、現世の報を自ら受くるのも罪亡しの一法ぢやが、それでは未來永劫焦熱地獄の苦難は免れぬぞよ。それよりも、佛道に歸依し、衆生濟度の爲めに、身を捨て諸人を救ふと共に、汝自身を救ふのが肝心ぢや」と教化した。市九郎は、上人の言葉を聽いて、又更に懺悔の火に心を爛らせて、當座に出家の志を定めた。彼は、上人の手に依つて得道して、了海と法名を呼ばれ、ひたすら佛道修行に肝膽を砕いたが、道心勇猛の爲

だらうか、僅か半年に足らぬ修行に、行業は氷霜よりも峻くなつた。彼は自分の道心が定まつても、もう動かないのを自覺すると、師の坊の許しを得て、諸人救濟の大願を起し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

○  
美濃から京都へ出て畿内の國々から中國筋へと罪障を償ふべく諸人の爲に身を粉々に碎いた雲水の旅を続け、只管善根を積む事に腐心した。然し半生の悪業を思ふ時、些少の善根によつてはその罪惡が償ひしれぬことを知つて、彼の心はともすれば暗くなるのであつた。がその度毎に不退轉の勇を振り起し、諸人救濟の大業を爲すべき機縁の至らんことを祈念した。

○  
享保九年の秋であつた。彼は赤間が關から小倉に渡り、壘前の

享保九年  
徳川吉宗の時

羅漢寺  
大分縣中津より  
四里、下毛郡上  
津村字跡にある  
寺。

國宇佐八幡宮を拜した後、山國川を遡つて羅漢寺に詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷に添うて辿つた。筑紫の秋は、驛路の宿り毎に更けて、雑木の林には、楡赤く爛れ、野には稻黄色く稔り、農家の軒には、この邊の名物の柿が、眞紅の珠を連ねてゐた。それは八月に入つて間のないある日であつた。彼は、秋の朝の光に輝く山國川の清澄な流れを右に見ながら、三口から佛坂の山道を越えて、午近き頃樋田の驛に着いた。淋しいこの驛で、晝食の齋にありついた後、再び山國谿に添うて南を指した。驛から出外れると、道は又山國川に添うて、火山岩の河



山國川

岸を傳うて走つてゐた。

歩み難い石高道を、市九郎の了海は、杖を頼りに辿つてゐた時、ふと道の傍に、此の邊の農夫であらう、四五人の人人が罵り騒いでゐるのを見た。了海が近づくと、その中の一人は、早くも彼の姿を見付けて、

「御出家様、これはよい所へ來られた。非業の死を遂げた哀れな亡者ぢや。通りかゝられた縁に、一遍の回向をして下され」と云つた。

非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた旅人の死骸ではあるまいかと思つた。了海は、過去の惡業を想ひ起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚のすくむのを覺えた。

「見れば水死人のやうぢやが、處々皮肉の破れてゐるのは如何した仔細ぢや」と、了海は恐る／＼聞いた。

「御出家は旅の人と見えて、御存じあるまいが、この川を半町も上れば、鎖渡しといふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が悉く難儀する所ぢや、この男はこの川上の柿坂郷に住んでゐる馬士ぢやが、今朝鎖渡しの中途で、馬が狂うた爲、五丈に近い所を眞逆様に落ちて、見られる通りの無慙な最期ぢや」と、その中の一人がいつた。

「鎖渡しと申せば、かね／＼難所とは聞いてゐたが、かやうな憐れを見ることは、たゞ／＼ござるかの」と、了海は死骸を見守りながら打ちしめつて聞いた。

「二年に三四人多ければ十人も、思はぬ憂目を見ることがある。無雙の難所故に、風雨に棧かたしが朽ちても、修繕も思ふに委せぬのぢや」と、答へながら、百姓達は死體の始末にかゝつた。

了海はこの不幸な遭難に、一遍の經を讀みをはると、足を早め

てその鎖渡しへと急いだ。そこまでは、もう一町もなかつた。見ると、川の左に聳えてゐる山が、山國川に臨む所で、十丈に近い絶壁に、斫り裁たれて、そこに灰白色のぎざ／＼した、襞の多い肌を露出してゐるのであつた。山國川の水は、その絶壁に吸ひ寄せられたやうに、此處に慕ひ寄つて、絶壁の裾を洗ひながら、濃緑の色を湛へて、渦巻いてゐる。

里人等が鎖渡しといつたのはこれだらうと、了海は思つた。道は、その絶壁に絶たれ、その絶壁の中腹を、松杉などの丸太を、鎖で聯ねた棧道が、危げに傳つてゐる。か弱い婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戦くも理であつた。

了海は、岩壁に縋りながら、戦く足を踏みしめて、漸く渡り終つて、その絶壁を振向いた刹那、彼の心には、咄嗟に或大誓願が勃然

として萌した。



積むべき贖罪しよくざいの餘りに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業に逢ふことを祈つて居た。今、目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命を奪ふ難所を見た時、自分の身命を捨てて、この難所を除かうといふ思ひつきが、旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百餘間に餘る絶壁を刎り貫いて、道を通じようといふ、不敵の誓願が、彼の心に浮かんで來たのである。

了海は、自分が求め歩いたものが、漸くこゝで見つかつたと思

つた。一年に十人を救へば、十年には百人、百年、千年と經つ中には、千萬人の命を救ふことが出來ると思つたのである。

かう決心すると、彼は、一途に實行に着手した。その日から、羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川に添うた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めた。が、何人もこの風來僧の言葉に耳を傾ける者はなかつた。

了海は、十日の間徒らな勸進に努めたが、何人もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、獨力この大業に當ることを決心した。彼は、石工の持つ鉋と鑿とを手に入れてこの大絶壁の一端に立つた。それは一個のカリカチュアであつた。削り落し易い火山岩であるとは云へ、川を壓して聳え立つ巉々たる大絶壁を、了海は、自分一人の力で、刎り貫かうとするのであつた。

「到頭氣が狂つた！」と、行人は了海の姿を指さしながら嗤つた。

カリカチュア  
Caricature  
漫畫。

しかし了海は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して觀世音菩薩を祈りながら、渾身の力を籠めて第一の鎚を下した。

それに應じて、唯二三片の碎片が、飛び散つたばかりであつた。再び力を籠めて第二の鎚を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から分離したばかりであつた。第三、第四、第五と彼は懸命に鎚を下した。空腹を感ずれば、近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向かつて鎚を下した。懈怠の心を生ずれば、只眞言を唱へて、勇猛の心を振るひ起した。一日、二日、三日、了海の努力は間斷なく續いた。旅人は、その傍を通る度に、嘲笑の聲を送つた。が、了海の心は、その爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に鎚を持つ手に力を籠めた。

鎚を振るつてゐさへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨もそこにはなかつた。極樂に生まれようといふ欣求もなかつた。唯そこに、晴々しい精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、夜毎の寢覺に、身を苦しめた自分の惡業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。

○  
幾度か春去り秋來つたが、了海の鎚の音は山國川の水聲と同じく不斷に響いてゐた。了海の念願に對する村人達の態度は、或時は嘲笑に、或時は驚嘆に、又同情にと變つて行つた。時には山國川に添ふ七郷の村人達によつて、數人の石工が雇はれた事もあつた。然し工事は中々進捗しなかつた。村人の心には同情と落膽とが代る／＼に起つては消えて行つた。然し了海には、かうした人の心は全く沒交渉だつた。彼には、たゞ眼前の大岩壁のみが存在するばかりであつた。了海は、洞窟の中に端坐し始めてからは、や十年にも餘る間、暗い冷たい石の上に坐り續け

てゐた爲に、顔は色蒼ざめ、雙の眼は窪んで、肉は落ち骨は露はれ、この世に生ける人の姿とも見えなかつた。が了海の心には不退轉の勇猛心が頻りに燃え盛つてたゞ一念に穿ち進む外には何物もなかつた。

○

一年經ち、二年經つた。一念の動く處、彼の瘠せた腕は、鐵の如く屈しなかつた。ちやうど十八年目の終であつた。彼は何時の間にか、岩壁の二分の一を穿つてゐた。

里人は、此の恐しい奇蹟を見ると、最早了海の仕事を、少しも疑はなかつた。彼等は、前二回の懈怠を、心から恥ぢ、七郷の人々が、合力の誠を盡くして、舉つて了海を援け始めた。その歳、中津藩の郡奉行が、巡視して、了海に對して、賞美の言葉を下した。近郷近在から、三十人に近い石工が、蒐められた。工事は、枯葉を焼く

中津  
大分縣にある  
町。

火のやうに進んだ。

人々は、衰殘の姿痛々しい了海に、

「最早そなたは、石工どもの統領をなさりませ。自ら鎚を振るふには及びませぬ」と、勧めたが、了海は頑として應じなかつた。彼は、燈れ、ば鎚を握つたまゝと思つてゐるらしかつた。彼は、三十の石工が、傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ、懸命の力を盡くすこと、少しも前と變らなかつた。しかし、人々が了海に休息を勧めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く、坐り續けた爲であらう、彼の兩脚は、永い端坐に傷み、何時の間にか、屈伸の自在を缺いてゐた。僅かの歩行にも、杖に縋らねばならなかつた。

その上、長い間、闇に坐して、日の光を見なかつた爲でもあらう、また不斷に、彼の身邊に飛び散る、碎けた石の碎片が、その眼を傷

つけたためでもあらう、彼の兩眼は朦朧として光を失ひ、物のあ  
いろも辨へかねるやうになつて  
た。

さすがに、不退轉の了海にも、身に  
迫る老衰を傷む心はあつた。身命  
に對する執着はなかつたけれど、中  
道にして瘞れることを、何よりも無  
念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱ぢや」と、彼は心  
の裡に叫んで、身の老衰を忘れよう  
と、懸命に鉋を振るふのであつた。

冒し難き大自然の威嚴を示して、了海の前に立ち塞がつてゐ  
た岩壁は、何時の間にか衰殘の乞食僧の鐵のやうな心に貫ぬか



青の洞門

れて、その中腹を穿つ洞窟は、命あるものの如く、一路その核心を  
貫ぬかんとしてゐるのであつた。

○

市九郎の爲に、横死を遂げた中川三郎兵衛の一子實之助は、父の  
仇を尋ねて、諸國遍歴の旅に上つたが、空しく九年の月日を送つ  
た後に、延享二年の初、九州の宇佐へと辿りついた。本懐成就の  
祈願を、八幡宮の神前に籠めた彼は、ふと憩うた茶店で耳にした  
話から、はしなくも敵、市九郎の所在を知り得た。心の底から憎  
悪を感じ得る悪僧を想像して、父の仇が討てる喜びに満ちてゐ  
た彼は、餘りに意外な敵の姿に驚いた。石工や周圍の人々は、了  
海を庇ひ立て、中々討たさうとはしなかつた。彼は遂に、了海  
の念願が成就する迄待たうと約束してしまつた。そのまゝ、二三  
日を無爲に過したが、敵を眼前におきながら日を送るいらだゝ



しさに堪へ兼ねて、五日目の月の冴えた晩、彼は洞窟に忍び込んだ。

○

洞窟の中は、入口から来る月光と、所々にくり明けられた窓から射し入る月光とで、所々ほの白く光つてゐるばかりであつた。彼は、右方の岩壁を手探りく、奥へくと進んだ。入口から二町ばかりも進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、くわつ、くわつと間を置いて響いて来る音を耳にした。彼は最初それが何であるか判らなかつた。が、一歩進むに従つて、その音は擴大して行つて、おしまひには、洞窟の中の夜の静寂の裡にこだまする迄になつた。それは明らかに、岩壁に向かつて鐵鎚を下す音に相違なかつた。實之助は、その悲壯な、凄みを帯びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近づくに従つて、玉を打

ち碎くやうな鋭い音は、洞窟の周圍にこだまして、實之助の聽覺を猛然と襲つて来るのであつた。彼は、この音をたよりに、這ひながら近づいて行つた。この鎚の主こそ敵了海に相違あるまいと思つた。私に一刀の鯉口を寛げながら、息を潜めて寄り添つた。その時、ふと彼は鎚の音の間々に、嘩くが如くうめくが如く了海が經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしわがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜、人去り草木眠つてゐる中に、たゞ暗中に端坐して鐵鎚を振つてゐる了海の姿が、墨の如き闇にあつて尙實之助の心眼に歴々と映つて來た。それはもはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、たゞ鐵鎚を振つてゐる勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は、握りしめた太刀の柄がいつの間にか緩んでゐるのを覺えた。彼はふと自分自身を顧

みた。既に佛心を得て、衆生の爲に碎身の苦を嘗めてゐる高德の聖に對し、深夜の闇に乗じて、おひはぎの如く、獸の如く、曠蕪の劔を抜きそばめて、近寄らうとする自分を顧みると、彼は強い戦慄が身體を傳うて流れるのを感じた。洞窟を搖がせる力強い鐘の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打ち碎いてしまつた。彼は潔く竣功の日を待ち、彼との約束の果さるゝのを待つより外はないと思つた。實之助は、深い感激を懐きながら、洞外の月光を指して洞窟の外に這ひ出たのである。

その事があつてから、實之助は洞窟の外の木小屋の内に朝夕を送りながら、心靜かに劔貫の成就されるのを待つてゐた。彼はもう老僧を打つて立ち退かうと云ふやうな險しい心は少しも持つてゐなかつた。了海が逃げも隠れもせぬ事を知ると、彼は好意を以て、了海がその一生の大願を成就する日を待つてや

らうと思つてゐた。彼一人がなすこともなく暮してゐるにも拘らず、周囲の石工達は寸陰をも惜しんで懸命に働いて居た。了海の不斷の精神がいつの間にか石工たちの心にも、浸み渡つてゐるやうであつた。

彼等は實之助に對して朝夕快い挨拶を贈つた。

「お武家様、今日は何處へおはせられた」

などと問ひかけられる度に、實之助は自分の所在のない生活が氣になつてゐた。周囲の人々が、凡て狂氣のやうに働いてゐる中に、自分一人漠然と暮してゐる事が、彼に心苦しく思はれ始めた。二月もかうして漠然と暮してゐる内に、彼はふと思ひついた。かうして爲す事もなく待つてゐるよりも、自分もこの大業に一臂の力を盡くすことによつて、幾何かでも成就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に復讐の期日が縮

められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼はその日から石工の群に伍して、鎚を振ひ始めたのである。

かうして敵と敵とが相並んで鎚を下し始めたのである。實之助は本懐を達する日が一日も早かれと懸命に鎚を振ふのであつた。了海は實之助が實現してからは、一日も早く大願を成就して惜しからぬ命を孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう、彼は今迄に見られなかつたやうな烈しさで、狂人のやうに岩壁を打ち砕いて行くのであつた。

その内に月が去り月が來た。最初は自分自身の爲に鎚を振つてゐた實之助もこの劔貫の大業を爲し甲斐のある仕事であるときへ思ふやうになつてゐた。阿修羅の如く鎚を振つてゐる了海の姿を見てゐると、彼はその勇猛心に動かされて、ともすれば讐敵の恨を忘れ勝ちであつた。石工どもが晝の疲を休め

てゐる眞夜中にも、この敵同志は黙々として鎚を振ふことなどもあつた。

夫は了海が樋田の岩壁に第一の鎚を下してから丁度廿一年目、實之助が了海に廻り逢つてから一年六ヶ月を経た延享三年九月十日の夜であつた。この夜は石工どもは悉く小屋に退いて、了海と實之助のみが終日の疲労にもめげず懸命に鎚を振つてゐた。その夜九つに近い頃であつた。了海が力を籠めて振り下した鎚が朽木を打つが如く何の手筈へもなかつたので、思はず力餘つて、鎚を持った右の掌が巖に當つた。その時であつた。彼はあつと思はず聲を上げた。了海の朦朧たる老眼にも紛れなくその鎚に破られた小さい穴から、月の光に照された山國川の姿が歴々と映つたのである。了海は「おう」と全身をふるはせるやうな名狀し難い叫聲をあげたかと思ふと、夫につゞい

て狂うたかと思はれるやうな歡喜の泣笑ひが洞窟を物凄くどよめかしたのである。

「實之助殿御覽なされい。廿一年の大誓願今宵はしなくも成就いたした。」

かう云ひながら了海は實之助の手を執つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黒ずんだ土の見えるのは岸に添ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とはそこに手を執り合つて大歡喜の涙に咽んだのである。が暫くすると了海は身を退つて、

「いざ實之助殿約束の日ぢや、お斬りなされい。かゝる法悦の最中に往生いたすなれば、未來は淨土に生るゝこと必定疑ひなしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば石工共が妨を致さう、いざお斬りなされい。」

と彼のしはがれた聲が洞窟の夜の空氣に響いた。が實之助は了海の前に手を拱ぬいて坐つた儘、涙にむせてゐるばかりであつた。心の底から湧き出づる歡喜にひゞく洞びた老僧の顔を見てみると、彼を敵として殺す事などは思ひ及ばぬ事であつた。敵を打つなど、いふ心よりも、このかよわい人間の二つの腕によつて成し遂げられた偉業に對する驚異と感激の心とで胸が一杯であつた。彼はゑざり寄りながら再び老僧の手を取つた。二人はそこに凡てを忘れて感激の涙にいつまでも浸つてゐたのであつた。

(恩讐の彼方に)

二〇 川 上 (和歌)

行く水の末はさやかにあらはれて川上くらき  
月の影かな

香川 景樹

景樹  
鳥取の人、京に  
移り住む。桂園に  
と號す。天保十  
四年歿。